
東方見聞記

賽場 勇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方見聞記

【Nコード】

N9752U

【作者名】

賽場 勇

【あらすじ】

村紗「主人公こと横井 夜須（通称…ヤス）は大の日本史好き。でもまあ、好きな物が祟って事件に巻き込まれることってありますよね。彼もまた、そんな人の一人でした。幻想郷について調べ、そして幻想入り。偶然通りかかった星に拾われ、命蓮寺に住むことに。まあ本編では私は出てきませんが、次の話あたりでは登場するらしいので、楽しみにしていてね!」

第1話↑鼻毛↓

やあ、ようこそバーボンハウスへ。

俺の名前は横井夜須。まあ、無難なところでヤスと呼ばれているな。学生時代はよく小遣いを資金として日本の歴史的建造物を見るために旅をしたものだ。

それだけ歴史好きってことだな。

で……今俺は何処に居るのでしょう……？

周りを見渡してみるが……見覚えがない場所だ。

俺はチバタウンにすんでいるが、こんな風景は見たことがない。

見渡す限りの自然、緑。

まるで、失われた日本の風景のようだ。

ご存じの通り、今のJapanは開発され、世界でも先端の方の技術力を有している。

その反面、失われたものも大きい。

そのひとつが、自然だ。

それは世界全体にも言える事だ。

かねがね思っていたことだが、今の世界は不利益をかえりみる事を忘れていたのだと思う。

人類が利便性を求める限り、自然破壊は続く。

昨今は世界単位で対策も始まっているようだが、一度知った利便性はなかなか体から抜けないものだ。

さらに人間はそれを超える利便性を求める。

つまりは、楽をするために自然を犠牲にしたとも言える。

「それにしても、心地よい……」

俺は都会のごみごみした雰囲気よりも、自然豊かな空間がお好みだ。でもまあ、依然ここがどこかは分からないのだが。

とりあえず、誰かを探さないと。

周りを見渡してみる。

「おお……見渡す限りの森林……」なにもない。
つまり誰もいない。

仕方ないので適当に歩いてみる。

「だぁぁ……なんもないぞ」

無駄に体力を消費しただけじゃないか。

というか何分くらい歩いたんでしょう？

時計を取り出す。

が、

「あ、あれ？ないぞ？」

時計がない。

まさか落とした？

「く、くそう……」

次に携帯電話を取り出す。

これも人類が利便性を求めた結果の産物で、使う理由はなかったの
だが、上司が、

「連絡とれないからもっとけどろぼう」

といって買ってくれたので、厚意に甘えて、使わせてもらっていた。
もちろん月々の料金は自分で払っている。

開いてみると、

「……ゑ？」目を疑った。

携帯の時間表示がおかしくなっている。

機械はあまり使わないが、苦手というわけではない。

しかし、さすがにこれはどういう状況なのかわからない。

俺が携帯の液晶を凝視していると、

「あら、あなたは？」

声が聞こえた。

「え？俺は……って、人？」

「え、いや、正確には人ではないのですが……」

振り返って声の主を見る。

俺の目に映ったのは、全体に黄色くところどころに黒がかった髪をした少女だった。

「で、では、貴女は一体？」

「私の名前は寅丸星。毘沙門天の代理にして、聖の信仰を一身に受けし者」

び、毘沙門天だあ？

「毘沙門天って、あの毘沙門天？」

しかし、代理？

「その辺については、後で説明しましょう。とりあえず、私の寺まで行きましょうか」

毘沙門天の代理を名乗る少女に、寺まで案内してもらうことに。まったく、どういう状況なのか……

不思議なこともあったもんだ。

途中、色んなところから殺気を感じながらも、寅丸……星だっけ？という女の子に案内され、お寺についた。

「こちらが、聖がおわす、命蓮寺です」

「命蓮？どこかで……」

たしか、何かの書物に載っていたはず。

「ご存知でしたか。聖の弟こそ、この寺の名の由来ともなった、命蓮です」

「聞いたことはあったが、まさか実在していたとは……」

「あら、星ではないですか」またしても女性の声が。

「聖、今戻りました」

「彼女が、聖なのか？」

俺は小声で星に聞いた。「如何にも。彼女が聖です」

聖と思われる女性が口を開いた。

「聖と申します」

「名は……」

記憶が正しければ、命蓮の姉は、尼公のはず。

「白蓮、と」

ありゃ、違った。

「もったも、昔は聖尼公と名乗っていましたが……」

聞くと、命蓮が没した時に、白蓮と名乗り始めたらしい。

「それにしても星、今まで何処へ行っていたんです？」

「見聞を広めるため、幻想郷を散歩していたところに、彼を見つけ、放っておく訳にもいかなかったので、此処に連れて来ました」

話を聞き、聖……白蓮はこちらを向き、俺に語りかける。

「単刀直入に聞きます。あなたは外の世界の人ですか？」

そ、外の世界？

「えっ？ここはどこ……」

「どうやら外来人のようですね……」

「外来人……」

外から来た人類。

「まず、此処は幻想郷です」

幻想郷……！

俺がここにくる直前、その存在を知った世界。

もしかして、俺が幻想郷を知ったから、ここに飛ばされたとか？

「貴方は、幻想郷のことをどこまで知っているの？」

「過去、幻想郷が俺たちの住んでる世界と繋がっていたことくらいしか」

確か、明治初期くらいの歴史書をあさっていたときだ。

理想郷（歴書の種類によっては異世界、神隠しなどとも書かれていた）という単語が目についた。

気になったので調べることにし、東の国に存在していたということをつき止める。

そこに言って話を聞いてみた。

確かに理想郷は存在していた。

名を、幻想郷。

昔は繋がっていたのだが、今では結界によって隔絶されている。

その結界の内側、外からの人間を拒む世界がここ、幻想郷である。そんな調査を終え、我が家に帰り一息ついていたところ、なんかわからないけど意識を失ってしまった。

「それで、気が付いたら森に居て、たまたま通りかかった星にここまで案内されたということですね」

「はあ、そうなりますねえ」

俺の話聞き終えた聖は一息つき、俺にこんな提案を持ちかけた。

「行くあてもなさそうですし、貴方さえよろしければしばらくここに住みませんか？」

なんとまあ、願ってもない提案だ。

「そ、そうですね、お願いできます？」

慣れてもない敬語を使ってみる。

「あ、普通どうりに話して結構ですよ」

「あ、はあ……」

なんか、年上(?)に敬語を使わないってのは妙な気分だ。

聖が先導し、俺と星がそれについていく形で寺の中に入っていく。

「そういえば」

「？」

声を上げた俺に気付き、星はこちらを向く。

「なんで寺なのに船？」

正確には船の名残が残っているだけだ。

ほぼ寺だが、船の様相も残している。

「ああ、この命蓮寺は、村紗の聖輦船が変化したものなのです」

村紗? って誰やねん。

まあ、聖輦船とやらが変化してこの土地に着陸したのが命蓮寺らしい。

しばらく歩いているとある疑問が浮かんだが、ききたくなかった。

「? どうかしましたか？」

怪訝な顔をしていたらしい俺に、星が訊ねる。

……船は普通、着陸しない……

……考えたら負けか。恐るべし幻想郷クオリティー。

「ここでは、常識とらわれてはいけないのか……」

「は、はい？」

星が聞き返すが、俺は答えない。

彼女もまた、幻想郷の1員だからね。

とりあえず、命蓮寺に住まわせてもらうこととなった。

第1話↪↑鼻毛↪（後書き）

紫「そしてまた黒歴史が一つ増えた……！」

嬉しくねえええ！

紫「そうね、10年後あたりにでも見て絶望するわね」

く、くそお……

紫「とりあえず、あとがきだけど、何か言うことはあるの？」

特に何も

紫「なら、小説の雰囲気でも伝えとけば？」

そうっすね。

基本的に更新はまばらで、間が開くこともあります。

紫「その辺も考慮して閲覧してくれると嬉しいと作者は言ってるわ」

そうね。

さらに内容も今は普通だけどたまに暴走してアレな表現が含まれる場合もあります

紫「それが苦手な人はってわけね」

いろいろ制約があるねえこれも。

まあ万人が楽しめる小説なんて大抵は作れないし……

自分は自分で出来る限り楽しませてみるよ。

紫「面白い決断ね。私も見守るとしますか」

……時に紫さん

紫「なにかしら？」

なんでP C？しかもF P S？

紫「最近はやりなのよ」

誰の間だよ……

紫「とりあえず、これにて第1話も終了ね」

まだまだ始まったばかりだし、当面は完結させることを頑張ろう！
未来の読者たちと一緒に完結を迎えられるよう努力します！

紫「うわライフルとか卑怯な」

S R使い全否定ねO r z

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9752u/>

東方見聞記

2011年10月9日10時08分発行